FOR YOU（フォーユー）
男女共同参画社会の実現に向けて
男女共同参画情報紙 第47号

〈十文字学園女子大学メディアコミュニケーション学科の学生〉

～若者が考える 男女共同参画社会　Part3～

男女共同参画社会をどう実現していくか、若い人たちにも関心を持ってもらいたいという願いを具体化するために、十文字学園女子大学メディアコミュニケーション学科石野榮一教授の協力を得て、同大学の学生に市内の職場で働く方々にインタビューをしていただきました。

男性女性ではなく、やりがいのある仕事を

埼玉県南西部消防本部
消防副士長
中山翠さん

皆さんは、消防士と聞くとどのようなイメージがありますか。男性の職業というイメージが強いのではないでしょうか。

消防庁の統計では、全国約16万人の消防職員のうち、女性はわずか4千人程度です。そうした環境の中、新座・朝霞・志木・和光市を管轄地域とする埼玉県南西部消防本部で女性消防士として勤務する中山翠消防副士長にお話を伺いました。

◆消防士を目指した理由

「人を助ける仕事がしたかったからです。消防士になる前は別の仕事に就いており、仕事の傍らライフセービングも行っていて、何回も溺れた人を助けました。でも、最終的には救急隊にお願いするしかないのです。そんな体験をする中で、最後まで人を助ける仕事に関わりたいと思い、消防士への転職を考えました。」

◆職場の環境

今回の取材に当たり、私たちが一番関心を持っていた、消防士になって6年経過した今、男性が多い職場で中山さんがどのような思いで仕事をしているのかを伺いました。「特に男性だから、女性だからということはないです。例えば、現場で重い物を男性が運んだ方が効率は良いですよね。大切なことは男女どうこうではなく、仕事を進める上で効率の良さを優先して行動することが大事だと考えています。また、筋トレは男性と同じ回数をこなしますよ。休日に個人的に鍛えたりもします。」と語ってくださいました。

◆消防士の仕事

中山さんが担う災害現場での仕事は、男女問わず激務で危険を伴います。そのような現場で感じていることも伺いました。「火災現場で長時間の活動は正直しんどいです。メンタル的に辛いのは、小さなお子さんや私と同じ世代の人が亡くなった場面などに遭遇したときですね。でも、火災現場などで感謝の言葉を掛けてもらった時は、『ああ、自分も役に立てているんだ』と嬉しくなります。」と仰ってくださいました。

◆消防士になって感じたやりがい

女性消防士ならではの「やりがい」とは何でしょうか。「今は消防車の乗務ですが、応援で救急車に乗ることもあります。傷病者や家族の方から『女性隊員がいてくれて安心した』と声を掛けてもらうこともあります。」と中山さんは語ります。女性であるからこその利点が消防士という職業でいかされているのではないかと受け止めました。

◆最後に

平成6年の「女性労働基準規則」一部改正で女性の深夜業務の制限が解除され、女性消防士も24時間体制で勤務ができるようになり、活躍する女性が増えています。これから消防士を目指す女性へのアドバイスをお願いしました。少し考えた後、中山さんは「消防士と言っても部署は様々で、男性女性ではなく、自分に合ったやりがいを持てる部署が見つかればという考えで良いのではないかと思います。もちろん体力も大切ですが、チームで過ごす時間が多いので、一番は人間関係を上手に結ぶことです。」と語られました。

（文・小野寺七海、小林聖名、サイ、宍戸姫子）

資格は同じ 自信を持つこと

医療法人社団 武蔵野会
新座志木中央総合病院
検査救急係長
中島宏樹さん

病院などで男性看護師と接する機会は格段に増えました。「男性看護師が増えた」という印象は、逆に言えばそれだけ看護師＝女性というイメージが強いということでしょう。「男女共同参画社会の実現に向けて」をテーマにインタビューに取り組んだ私たちは、女性が多い職場で働く男性にお話を聞いてみたいと考えました。そこで医療法人社団武蔵野会新座志木中央総合病院で看護師として働く中島宏樹係長を訪ねました。

◆看護師として働く

看護師暦13年になる中島さんに「女性が多い職場に抵抗感はなかったのですか。」と率直に聞きました。「確かに、働き始めた頃は女性の職場というイメージが強く、女性の患者さんに接するとき『男性でいいのかな』と思うことが多かったです。しかし、仕事を積み重ねていく中で、辛そうだった患者さんの症状が回復して社会復帰ができる姿を見ていると、この仕事に就いて本当に良かったと思いました。やりがいを感じることに男性も女性も関係ないですね。」と語られました。

中島さんの支えになったのが、「持っている資格は一緒。患者さんをサポートする、役に立つことに男女は関係ない。自信を持ちなさい。」という言葉。中島さんが看護師になりたての頃の先輩や上司からの叱咤激励の言葉です。その言葉を大切にしながら仕事に向き合ってきました。「今まで仕事で、男性だからと困ったことはなかったです。」と語りました。

◆看護師を目指した理由

中島さんは、高校卒業後、事務系の仕事に就きましたが、「人助けができて、毎日変化のある仕事がしたい」と半年で退職。次の仕事は看護師と決め、家族や友人に打ち明けたところ、止める人は誰もいなかったと言います。逆に大勢の人が「頑張れ」と応援してくれたそうです。

中島さんが学んだ看護学校は、同学年83人中、男性はわずか3人だけ。現在は男性も増えていますが、「当時、男性の人数はこんなものかなと思っていました。実習は、外科、内科、整形外科、脳外科、婦人科など一年半ほどみっちりあり、長くて大変でした。」と笑いながら話してくださいました。

現在、中島さんが勤務する職場は22人中男性が6人です。まだ3割にも届きません。それでも他の所属より男性看護師の割合は高く、何より学生時代と比べると、男性看護師は着実に増え、職責も高まっています。中島さんは、今年係長に昇進し、所属長になりました。「所属長として所属をまとめ、引っ張って行くことが今の目標です。」と語られました。

◆最後に

中島さんに看護師を目指している男性へのアドバイスをお願いしました。「看護師を目指すことは、他の仕事を目指すことと何ら変わりはないと思います。男性女性は関係ないし、女性が多いから働きにくいということはないと思います。大切なのは、自分のやりたいことを目指すということ。女性社会という先入観は持たずに、ぜひ目指してほしいです。」

（文・竹山智美、林紀花、リュウ・セイウン）

あとがき

「For You」には、真の男女共同参画社会実現に向けたメッセージを、全ての人に（＝For You）発信したいとの願いが込められています。

年2回、春期と秋期に発行しています。

気づきが出発点

昨年に続き、平成30年度前期「企画・インタビュー手法」という授業で取り組んだ学生のインタビュー記事を掲載する機会を頂きました。インタビューは、「異性が多い職場で働く方々の姿や考えを知る」ことを目的に、数年先に実社会に巣立つ学生に男女共同参画を考えてもらう機会にしてもらうことにしました。新座市男女共同参画推進プラザのご協力を得て、4人の方々にお話を伺う機会ができました。学生にとっていろいろな「気づき」があったようで、有意義な機会となりました。この場をお借りしてご協力いただいた皆様に感謝を申し上げます。

（十文字学園女子大学教授・石野榮一）

編集・問合せ

にいざほっとぷらざ5階
男女共同参画推進プラザ
☎048-486-8639